フランス中世王権と地方統治
—12・13世紀における令状(mandement)の史料論的検討—

渡辺 節 夫

はじめに

本稿はフランス中世中期（11－13世紀）におけるカペー王権の発展過程、すなわち“封建王制(monarchie féodale)”の確立に至る過程をその地域統治法の面から観察しようとするものである。筆者はこれまでのフランス王権に関する一連の論考を通じて、フランスにおける封建王制の確立を13世紀中葉に求めることが妥当性を指摘してきた。それは一方で王を最高封主（suzerain）とするレーン制的階層秩序の形成を意味するが、他方でそれを求める機会を失う条件が不可欠である。それがいわゆる“非レーン制的要素”であるが、それは大きくは王が手にし得る権力（potestas）と権威（auctoritas）に分けることができる。

従って、封建王制の確立過程を明らかにするためには、如何なる方法、手段のもので、カペー諸王が権力と権威を手に収め、そのことによりレーン制的階層秩序を求めるに機能せしめて、その至上性を確立していったかが問題となる。ここでの権力という場合、その中心をなすのは王領地と直轄行政機関である。筆者はすでにカペー王の直轄行政機構については中央の統治機構たる“宮廷（cour royale）”、即ち“狭義のクリア・レギス（curia regis）”の中世中期における発展過程を検討した(1)。

そこで狭義のクリア・レギスが聖・俗諸侯層、とりわけ上層貴族（バロン）を排除し、12世紀後半以降、“王の騎士（miles regius）”、“王の聖職者（clericus regius）”と呼ばれる下層領主層に主として依拠する体制として確立することを指摘した。しかし、王国を全体として支配する上では強力な権力基盤を有する聖・俗諸侯層を統括することが不可欠である。即ち、レーン制的な締結が存在するだけでは不十分であり、彼らを王政に何らかの形で参画させるための具体的な手段が求められるのである。彼らの利害を如何なる形で国制に反映させつつ、王の主導性の下で王国の一体性を実現するかが問題となる。

その意味で別稿において、“王国全体集会（assemblée générale）”(2)と“王国同僚制（pairie royale）”(3)を検討したが、そこで確認された点はいずれも聖俗諸侯層が主体的にその利害を国政に反映させ、延いては王権に対し効果的に制限を加えるに至らず、結局、狭義のクリア・レギスを補完する位置に留められたということである。

本稿では以上の検討結果を踏まえ、中央の王権の意向が如何なる手段により地域統治において実現し得たかが課題となる。具体的には、地域統治を基本的に支えることになるプレヴォ・パインなどの統治体制の確立過程を概観した上で、それに対応して、王の指令を彼らに伝達する手段
たる令状（mandement, mandamentum）の書式的な整備が如何にして実現したかを検討する次第である。

I. 地方統治と国王役人層

ここでは、国王の地方統治体制の確立過程を11世紀初頭から13世紀後半にかけてのプレヴォ・パイイ制の動向に力点を置いて明らかにすることが課題である。

（1）プレヴォの形成とその基盤・職権

王領地支配の領域化、王権の教会、都市、他の諸侯領への影響力の拡大の上で、地域的統治組織の発展が重要であったのはいうまでもない。カペー初期において地域統治の役割を中心に担ったのはプレヴォ（prévô）たちであった。彼らは所領役人の、貴族の性格が強いが、徐々に収益徴収権や裁判権を手に入れるようになった。しかしその権威は低く、貴族の訴訟を自ら裁くことはできなかった。また、12世紀前半には、王領地は他の諸侯領同様、城主支配圏（シュテルニー）を基礎単位とするようになるが、王直属の城には城代が配置され、管理をおこなった。

王のプレヴォの史料上の初出は1019年であり、国王証書に現れる事例は1057年からであるが、1082年以降は稀となる。このことは、现存最古の王の指令文書たる令状（mandement, mandamentum）が1089年のものであることと併せて、フィリップ1世治世後半に地方役人の統制が強化されたことを示すものである⑥。また、プレヴォ職は最初は世襲制であったが、やがて期限つきの請負制となり、管区が設定されるに至った。彼らの出自は基本的にイル・ド・フランスの城主層であり、国王大官僚（grands officiers）との親族関係を認められる⑤。

プレヴォの経済基盤について、しばしばその半封建的性格が指摘される。しかし、ルイ7世の治世初期の1証書（1143－44年）では、教会領からの“悪しき、法外な慣習的諸贡租（malae et exactivae consuetudines）”の徴収が王により禁止されて以降も、その一部が旧来どおり、プレヴォのために留保されているが、その後に是特に“封”とは見なされてはいない。フィリップ2世期にはプレヴォ職は封ではないかなるのは事実である。因みに同王の治世初期の1国王証書（1191年）には王のサンリスのプレヴォ（prepositus noster Silvanectensis）ジョフロワとその後任者による修道院の“荘園と付属物件（manerium suum cum pertinenciis suis）”の定額請負（firma）の事例が記されている。彼らは初め最初に200リブラを支払い、当該荘園の償還（aquitatio）の際に100リブラを支払うものとされている⑥。なお、プレヴォの数は12世紀前半に約30であったが、1190年頃には約35となり⑦、13世紀初頭には62へとほぼ倍増している。

プレヴォは王権を代行するわけであるが、その権限は“potestas”と表記される。即ち、裁判権は“王のプレヴォたちの権力により”行使され、彼らとその下僚たち（servientes）は“その管轄区域内の（in vestris potestantibus）”教会財産を保護・監督することが義務付けられている。また、ルイ6世治世初期の1国王証書ではプレヴォの下僚たち（ministri）の一部をなす裁判官を“judex publicus”と表記しており、その公的見解が強調されている⑧。

上記のプレヴォのために留保された貢租（reditus）は現地の荘官（major）⑨が徴収し、彼ら
のもともにもたらすものとされている。また、国外婚により生まれた4名の従属民の帰属をめぐる教会との交渉（1152－53年）はブレヴォが直接行なっているが、実際の選択権はその下僚（ministri）に委ねられている
（10）。

ブレヴォの出自と階層の点ではボワシー（Poissy）のブレヴォを務めたジェラールの場合が興味深い。彼の所有物権は王によりロブカンなる人物に贈与されていたが、その後、王の手により、40リブラを王に支払うことを条件にジェラールの息ゴーティエとその相続人に返還されるようになった。フィリップ2世の1国王証書（1198年）（11）には、対象物権が列挙されており、ボワシーのグランギアと付属物件、パン焼きがま、水車、入植民、採草畑だけでなく、封臣に対する授封地も含まれている。かなりの土地的財産を有していたことがわかる。加えて興味深い点は、そこにバルテリーミ・ド・ロワが有している5アールの採草畑は対象から除かれ、「それに関しては彼は我々の証書（carta）を持っている」と記されている点である。同バルテリーミは国王大官を以降3代目の王の下で務めることになる典型的な“王の騎士”層出身者なのである。ここにもブレヴォと国王大官の出自、基盤の共通性が看取される。

（2）パイイ・セネシャルの形成と二重統治体制

フィリップ2世治世の地域統治の革新としては何よりも、地方行政監視のために、有給役人であるパイイ（baili）或いはセネシャル（sénéchal）が各地に派遣されるようになったことが挙げられる。両者はほぼ同一の存在と考えてよいが、フランス北部・東部ではパイイと、西部・南部ではセネシャルと呼ばれる。一般に前者は1184年に、後者は1190年代に現れるとされる。しかしながら、既にルイ7世世には“baliivi”が現れており、彼らを12世紀の諸王が地方に派遣した監視官の直系の子孫とする見解も見られる。更に、ルイ7世が発した「ロリスの慣習法特許状」（1155－56年）の34条にはそれを“ユルボのパイイ管区内に（in baillata Harpardi）”居住する人々にも適用することが規定されている（12）。

ところで、パイイ制成立・発展の背景としては、12世紀後半における聖俗諸候領の①領域的支配の強化、②それに伴う王国統治組織からの離脱が挙げられる。①の事例としては司教管区統治における宗教判事制（officialité）の出現、②に関しては中央の国王大官であるセネシャルの名誉職化（1154年）、その不補充化（1191年）を挙げることができる。これはレーン制に依拠した王の行政・統治からの脫却の一端を示している。また、ここにはアングロ・ノルマン王朝の統治様式からの影響も認められる（13）。そこでは州長官（sheriff, viscomtes）と巡回裁判官（justitiarri）による二重の地域統治の形態がとられていたのである。

また、13世紀初頭のノルマンディー、アンジーの廃合もこの制度の発展を助長した。但しアンジー、トゥーローズなど西フランスの征服地域では、有力貴族出身のセネシャル層の権力を削減してパイイと同質化する方法が取られた。カルカソンヌ、ルエル、アジャンなど旧トゥールーズ伯領に関しては、フランス王はシモン・ド・モンフォールが1226年に導入したセネシャルを骨格とする地域統治体制を維持した（14）。

パイイは当初は移動的であり、その活動は間歇的であったが、徐々に管轄区域が設定されて任
地も明確になり、その活動も恒常的となった。また、1200年頃には地方統治は二重構造化することにより、より安定的なものとなった。その基本は既に有名なフィリップ2世の「遺言」（1190年6月）に提示されている（15）。そこではパイイが配下の各プレヴォに対し4名（パリでは例外的に6名）の「正規の賢者たち（hominis prudentes, legitimii）」を配置し、彼らの証言、助言により荘園に関する実務を処理させるよう規定している。

また、1210年には公道統制権（veiaria, voirrie）に基づく裁判に関して在地の領主と王権の協働関係、料料収益の折半が取り決められている。諸般の事情によりモンレリーのプレヴォ（prepositus de Monte Leherici）、公道管理官（vearius）、彼らの下僚たち（servientes）が主導する裁判が開催できない場合には、要請を受けて直ちにエタンプのパイイ（ballivus Stamensis）が「それまで遵守されてきた当該地の慣行と慣習に従って（ad usus ville et consuetudines hactenus observatas）」判決を下すよう命ぜられている（16）。また、1217－18年、ある伯が王への奉仕の代償として得ていた水車からのラント（定期金）100ソリドゥスを教会に贈与したが、そのラントを徴収し、遅滞なく教会に納入する役割を当該荘園のプレヴォが怠った場合には、当地のパイイまたはセネシャルはその権威により彼に迅速な執行を強要するよう義務づけられている（17）。

このような統治の二重構造化は、会計簿がプレヴォの項目とパイイの項目に岐別されていることからも裏付けられる（18）。また、前者には経常的な支出のみが、後者にはパイイを筆頭に、プレヴォ以下各種の役人（viguiers, voyers, bayles）一彼らは基本的に国王収益の徴収請負人であった一が多様な名目で徴収する臨時収入と彼らの支出が記載されていることから、パイイが地域財政を統括していたことがわかる。また、彼らが財務関係の責任者として作成した会計報告書は「狭義のcuria regis（クリア・レギス, 宮廷）」の主計官（maîtres des comptes）の監査を受けなければならなかった。

全体としてパイイ管区が固定化するのは1220－40年頃と見られ、ルイ9世時代には細部の手直しがなされたに過ぎない。地名を伴ったパイイ管区が会計簿に初出するのは1248年である。それはパイイの財政的な権限が強化されるとともに、地理的な区分も一層明確化、安定化したことを示している。1250－60年頃には、パイイはプレヴォの権限の一部を剥奪して、裁判、財務、軍事を一手に掌握するに至る（19）。これが真のパイイ制の確立であり、これを以って、地域統治体制が中央権力の組織化に先立って定着することができる。こうして、王権は広汎な権能と権限を忠実で有能なパイイ・セネシャルに委ね、彼らの活動に依拠して、中央集権化を推進することことができたのである。その意味で13世紀中葉までにパイイ・プレヴォの二重の地域統治体制が確立したことの意義は大きい。

（3）地方役人層と中央組織の連関

パイイと中央組織の関係であるが、それが王領内の各地において王権を代行するものである以上、原理的には“クリア・レギス（cour royale, 宮廷）”の延長として、その緊密な統制下に置かれていたことは言うまでもない。その最も初期的な形はクリア・レギスのメンバーが多様な監視総監として地方に派遣されるものであるが、彼らは徐々に代理官と見なされるようになる。しか
し、彼らの職務の力点が地域統治に置かれるようになっても、クリア・レギスへの参席義務は維持された。例えば、ルイ8世時代にはパイイが城代とともに、必要に応じてクリア・レギスに参席していたことが知られる。それはパイイの職務の私物化、世襲化を防ぐ方策でもあった。

また、このことはパイイの管区への人的配置の問題と連動している。特定の管区に特定の1人がパイイとして定着するようになるのはルイ9世の治世初期、1230年頃に過ぎないのである。それ以前には一つ管区に2、3名のパイイが配置されている事例も珍しくない。例えばサンリスでの1218年、1227年の“裁判集会（assises）”は3人のパイイによって主宰されているのである。また、パイイの活動範囲がその管区の周辺地域に及ぶこともあった。例えばブルジュのパイイが都民たちから臣従礼を受けるためにモンフェランに赴いている事例（1226年2月）が知られる（20）。

クリア・レギスの上層部分が、中央のクリアでの活動、地域管理の職務をいずれかを選択するようになるのは1253－54年に過ぎない。これはパイイが地域統治に専念し、クリア・レギスに召喚されなくなる1271年以降の傾向に繋がるものである（21）。両職の兼務が廃止されて、パイイとクリア・レギスのメンバーが疎密されるのは遅く、14世紀初頭、フィリップ4世治世においてである。

王領地の一部がアパナージュ（apanage, 親王領）化すると、そのパイイはアパナジストの管轄下に入った。しかし、ルイ9世時代に、しばしばパイイの任地が王領地とアパナージュの間を移動していると、王領地のパイイ管区で適用されていた統治制度がアパナージュにも導入されている点が目を引く（22）。これは両者間の関係が極めて密接であり、アパナージュが王権から半自律的であったことを示すものである。

パイイの任期に関して特徴的な点は、10年以上に及ぶ者が少なくない点である。フィリップ2世、ルイ8世、ルイ9世の3代にわたりパイイであった事例もみられる。このことは彼らが比較的若くして着任し、途中で解任されなかったことのみならず、彼らが有能であり、王への忠誠心が強かったことも示している。これは王の側が頻繁に彼らの任地を移動させることが、その自立化を妨げ、従属性を高める方策を取ることの成果でもある。この方策は特にルイ9世期に顕著となった。例えば1247－49年の3年間に総数17－18の管区において異動したパイイは20名に及ぶのである（23）。しかし同王の治世末期には財務関係以外ではクリア・レギスとの関係が弱まり、同一のパイイが長期にわたり同一管区に留まる事例が見られるようになる。

彼らの社会的出自は中央のクリア・レギスの役人たちと同様、基本的に在地の中小領主層であった。このことが彼らの家産的役人層（familiares）としての従属性と忠誠心の高さの要因であると思われる。例えば、物権放棄に関する王の1封臣の証書（1257年）の中で、ポーケールのセネシャル、ギヨームは単に“dominus”と呼ばれているだけでなく、“nobilis vir,Guilelmus de Autonno,miles, senescallus Belli Quadri”と呼ばれれているのである。この“nobilis vir”呼称は彼らが在地の有力な領主層の一員であったことを示し、“miles”呼称は彼らの王権への従属関係を示すものである。これと相前後して（1256－57年）、他の在地領主レモンの夫人（uxor quodam viri nobilis,domini Raimundi Peleti）が「父方の財産に対して有するすべての権利（omne jus sibi
competens in bonis paternis)」を放棄（返還）する代償として、彼は王に代わり250リブラの支払いを求められている。この件の仲介役を担ったエクス大司教フィリップの証書の中でも、彼は“dominus Guillelmus de Automno,miles, senescallus Belli Cadri et Nemansi”と呼ばれているのが知られる(24)。

パイイが不正行為で解任された場合、プレヴォから昇格する者もいた。その他、中央・地方の各種の国王役人、都市の首長から転ずる場合もあった。ノルマンディーなど征服地では、寵を得たパイイが職務の代償に封を授与され、有力領主に上昇する事例も頻繁に見られる。また、新規の取得地には旧王領地からパイイが補任された。ルイ9世の治世には、有能で地域の事情に通じた人物を補任するため、クリアでの経験は考慮せず、しばしば現地採用を行なった(25)。

国王役人の在地性の面ではプレヴォの下僚（serviens noster）ピエール（Petrus de Bocia）に関する以下の事例（1270年）(26)は興味深い。彼は在地の小領主ジャン（miles, dominus de Bosco Ernaudi）から一定額の金銭を代償に年額30リブラのラント取得権（annui redditus）を手に入れている。このラントは“ヴェルヌー＝のパイイ管区内、グロのプレヴォ管区（prepositura de Glocio in ballivia Vernoli）”において徴収されるもので、トゥールの管区（prepositura nostra Turonensis）を有するプレヴォの手から受け取るものとされている。そしてトゥールのパイイ（ballivus Turonensis）に対して、遅滞なく支払いが実行されるよう王から命令が出されているのである。この書状には王は同パイイを「上記の30リブラに関して封臣として受け入れる（recepimus in hominem nostrum de predictis triginta libris）」と記されており、この30リブラのラントは封として位置づけられている。

ルイ9世は1245年十字軍から返還すると行政改革に積極的に取り組むことになる。その一環としてパイイ制度の革新を重視したことは一連の動令の発布が示している。裁判関係では13世紀中葉に新たな“教会法的察査制度（enquête canonique）”が導入され、パイイはプレヴォとともにその収集にあたり、それをパイイ法廷において活用した。1258年には教会裁判権に関する協定がノルマンディーの司教たちとの間で成立すると、パイイは高利貸の遺産を没収し、それを司教に引き渡す役割を担った(27)。

II. 令状（mandement）の成立と諸特徴

以下、三箇に分けて令状の発展、書式上の整備過程を具体的に見ていくとともに、その送達法、機能の実態についても検討することとなる。

（1）フィリップ1世、ルイ6世、ルイ7世期（11世紀後半－12世紀後半）

一般に書簡の特殊形態と見なされる令状（mandement, mandamentum）の起源を、迅速かつ小型の証書（acte bref）の出現と結びつける見解が支配的である。その出現が実用的文書の再生、王領地管理の刷新と密接に連関していることは間違いない(28)。

他方で、令状には王自身、尚書長、王の取り巻きいずれの下署も添えられず、王のみの意志を示す点で、フィリップ1世期におけるカロリング的遺物たる古形の国王証書（diplômes）との類
フランス中世王権と地方統治—12・13世紀における令状（mandement）の史料論的検討—

縁関係を指摘する見解も見られる。しかし、現存する同王の治世末期（1089－1108年）の合計6
－8通の令状は、いずれも王の権威の確立を背景とした命令を示すもので、その対象、執行手
段、制裁措置は極めて明瞭である。受給者の利益の擁護を目的とし、実効性を欠く、定式化され
たそれ以前の国王証書との差異は顕著である

また、その命令内容の厳密性、表現の簡潔性、印壱の添付様式から、カペー朝期の令状
（mandement）が、アングロ・ノルマン王朝期に発展した令状（writ）およびグレゴリウス7世
（1073－85年）以降の改革派教皇の発した小書簡（brevia,brève）の影響を受けていることは否定
できない。こうして、令状はフィリップ1世治世末期には“王権の覚醒”を背景にして、証
書様式の一つとして流布するようになるのである。つづくルイ6世治世においてJ.-F.ルマリニエ
は、F.-L.ガーンスホフのフランドルに関する散逸した令状（1127－28年）についての研究の成果
に依拠して、この文書類型こそが「王にとって統治の最も通常の方法であった」と見なしている
程である

また、書式的には、フィリップ1世、ルイ6世時代の令状は通常結句‘vale,valete（健勝を祈るの意）’
で終わる、「ut carta haec firmitatem obtineat,nominis mei inscriptione et sigilli mei impressione
 corroborari feci et premuniri（本証書が確かなものとなるよう、署名と押印により強化され、補強
せしめる）」という“補強のための章句（clause de corroboration）”、下署、花押を伴わない点で、
書簡一般に極めて近いとされる。とりわけ親書（lettres missives）と比較した場合、起源は明ら
かに異なるが、常に「聖なる三位一体の名においてアーメン（In nomine sanctae et individuae
Trinitatis,Amen）」という“invocation verbale（三位一体への祈願）”を欠き、「Ludovicus,Dei gratia
Francorum rex（神の恩寵を得たフランス人たちの王ルイ）」のような“suscption royale（頒
書）”で始まり、次いで表題の宛先を一般に受益者ではなく、受信者のランクに合わせていると
いう点で、両者が極めて近い関係にある

確かにフィリップ1世期の典型的な3通の令状では書簡特有のvale,valeteで終わっている。
これに対して、ルイ6世期の令状と見なし得る7通のうちvale,valeteで終わっているものは4通
に過ぎない。その中で、特に同王の地方役人たち（prepositi,ministeriales,famuli）に宛てた3通に
ついては、最古のもの（1131年頃）がvaleで終わっているのに対して、つづく他の2通
（1135,1130－37年）ではvale,valeteが欠けている点が目を引く

ルイ6世の治世に発せられた書簡は令状を除いて16通が知られるが、vale,valeteの有るものと
無いものがあり、それぞれ8通ずつと相半ばしており、この傾向がそのまま令状に反映していると言
うことができる。しかもこの傾向は名状人の階層差に左右されないのである。換言すれば、
vale,valeteで終わるという古典的な書簡文脈が、ルイ6世期にかなり崩れていっているのである。

次のルイ7世治世については、純然たる書簡形式を踏襲した令状と見なし得る文書は多くはな
い。特徴的な点として、1）同王の治世初期から第二回十字軍への出征（1147年6月－1149年11
月）以前について多様な階層（諸侯、副伯、中小領主、司教・参事会、コミュニーンの主導層）が
宛先とされている点、2）同王の十字軍参戦中に事実上王権を代行していたヴェルマンドワ伯ラ

（39）
ウル（家令、1131－52年）とシュジェール（サン・ドゥニ修道院長、1122－51年）に宛てたもの
が比較的多く残されている点、3）王のプレヴォ（prévô）など地方官に宛てたものが余り多く
ない点を挙げることができる。

1）については全体的に、書式面から見た場合、特定人物を対象としてsalutem（挨拶を送る）
で始まる点では共通しているが、文法形式ながら、必ずしも末尾にvale, valetを伴っていない。
また全般に動詞としては「厳命する（mandamus）」、「命ずる（praecipimus）」が用いられている。
しかし、相手との関係、情況に応じて「汝の誠実さに対し厳命し、指示する（fidelitati
vestrae mandamus et praecipimus）」など若干婉曲的な表現が見られる。時には、「王の文書によ
り厳命し、指示する（per regia scripta mandamus atque praecipimus）」と記され、また、時にはこ
のregia scriptaはmandatum nostrumと言い換えられており、王が特定人物に対して特定の要請、命
令をなす場合、特定の文書たる令状（mandatum）を自ら発することが慣習化されていたことが
知られる。

また、2）の一連の書簡についてもlitteraeの他に、より明確なnostrae voluntatis mandatum（我々
の意思を示す令状）という表記が見られる。動詞表現についてもrogamus（懇願する）ではな
く、mandando supplico（厳命することによって懇願する）のような婉曲表現だけではなく、
直接的にmandamusと表記しているものもみられる。

また、3）の類型は同王の治世については、少なくとも12通が知られる。その中で最も古い王
の地方官（prepostiti,servientes）に宛てた市での商人の保護を命じた令状（1145/46年）は、末尾
にvale, valetを伴っていない上で、上掲のルイ6世期の地方官宛ての令状を継承している。この
点は、ほぼ同時期にルイ7世が発したフルリー修道院の権益保護のための令状（1147年頃）、パ
リのサン・ヴィクトール修道院に対する徒属人の支配権の再贈与のための令状（1137－54年）、
シャトーダンの聖マリア教会の所領保護に関する令状（1152年頃）－“scripita regia”と特記さ
れる－にも認められる。但し、ほぼ同時期のボンティニー修道院の物資の移動の自由に関する1
令状では末尾にvaletが現れている。

更って、1150年代後半の3通の特徴は、冒頭部分がそれ以前の令状同様salutemを伴い、直
接国王役人に宛てた形が採られているにも拘らず、末尾には共通に証書同様「専書長Nの手によ
り（data per manum ...cancellari N）与えられた」と起草主体となる専書長名が記されている点で
ある。また発給地名が明記されている点も共通している。更に、”hee littere”と表記されている
1通は別として、他の2通には発給年も記され、その一方には「我々の印璽により強化せしめる
（nostro sigillo confirmari fecimus）」と印璽への言及が見られ、他方には証人の列席が言及されて
いる。また、主文の動詞として、「厳命し、王の権威により指示する（mandamus et auctoritate
regia precipimus）」などが用いられている点はそれ以前の令状を踏襲している。

これらの点はルイ6世からルイ7世期の初期に一般化してきた上掲のような極めて簡略な令状
形式に証書（charte）的要素が流入したことを示している。この点と主文に物権や特権の贈与な
ど法的行為の要旨が、notitia（略述証書）同様、簡潔かつ客観的な形で示されかけているのが

（40）
連関しているものと思われる。その原基的な形態を典型的に示すものはクレールヴォー修道士たちの通行特権の保護に関する1文書（1163年）(43)である。この文書は“三位一体への祈願”で始まり、「(以下のことを)現在および未来の全ての人々に銘記せしめる（notum facimus universis tam presentibus quam futuris）」で主文の内容説明がなされ、その後で、発給地、発給年、列席者（証人）―国王大官たち（家令、執事、酒倉倉）―の連署、末尾に起草主体たる尚書長の名と花押が記されており、明らかな尊敬型証書の形態を採っている。しかし、重要な点は本文において要旨の説明の直後に、三人称ではなくが、母状同様、「よって我々は役人たちが……することを命ずる」と表記され、この文書作成の意図が基本的に国王役人たち（prepositi,servientes nostri）に対する王の命令の公表にあることである。

他方で注目すべき点はリュイ7世治世末期に、また、その初期と同様の簡略型の令状が見受けられることがある。しかもその末尾に、バリのノートル・ダム司教座教会の不従順な人々の取り締まりに関する令状（1169年頃）(44)のようにvaleteを伴うものと、サン・マルタン・デ・シャン修道院領での王の従属民による侵害行為の取締りをプレヴォに命じた令状（1154－80年）、ジョザファ修道院のために自己の封臣から贈与された授封物件の保護を命じた令状（1174年）(45)のようにvaleteを伴わぬものが並存しているのである。

以上から、リュイ7世期には令状の発達と類型化が見られるものの、基本的には末尾に発給地、発給年、印鑑への言及を欠く簡略形の令状が治世を通じて存続していたのが知られる。しかし、他方で証書的要素を取り込んだ令状も現れている点も銘記されねばならない。つまり、新たな証書形式の発展のもとで、その様式が令状に流入しつつも(46)、令状がまだ定型化していない段階としてリュイ7世期を位置づけることができる。同王の治世には王の地方官に直接宛てた令状はまだ少なく、その一層の定型化と量的拡大のためには、次のフィリップ2世時代における地方官（セネシャル・バイイ）制（初出1184年）の導入、王領地支配の在地性深化を待たねばならない。

（2）画期としてのフィリップ2世期（1180－1223年）

事実、フィリップ2世の治世初期には比較的数は少ないものの、治世全体（1180年9月18日－1223年7月14日）として見れば、以来よりもはるかに多くの地方官宛ての令状が残存している。同王の治世に発給された広義の証書類（actes）はほぼ完璧に全4巻の『証書集成』(47)に収録・刊行され、その総数は1824通にのぼるが、その中で国王の地方官に宛てられた令状は約80通を数える。

書式面から見た場合、特に治世初期の令状については以下の諸点を指摘することができる。即ち、①書簡の基本的な特徴である末尾の結句valeteを伴うものごく初期の1通のみ(48)であること、②日付の表記法では証書で一般的な「主の化体・受肉から何年目（ab anno incarnationis domini (verbi)）」が1205年2月付のもの(49)以降は殆ど見られないこと、③証書形式の特徴である末部における“強化のための印鑑への言及”が見られるものは4通(50)であるが、1190年6月付のものを最後にそれ以降は見られないこと、である。言い換えれば、フィリップ2世の治世の（41）
比較的早い段階で、a) "vale,vulete" に代わって末尾に発給地、発給年・月表記を付すことが一般化すること、b) 日付の年表記が単純な "anno domini" という形に統一されること、c) 印刷への言及が消滅すること、が知られるのである。ただし、末尾に発給地、発給年・月表記を欠くものが同王の治世を通じて散見される点は銘記されねばならない。

以上の一般的な傾向とは別に以下、いくつか特筆すべき点を挙げておきたい。先ず目を引くのは、令状の受領主体として、（イ）王の地方官とともに都市の構成員、「（ロ）世俗諸侯の役人たちが現れる事例が見られることである。（イ）の事例は治世を通じて散見され、具体的には、「prepositus et major communie」、「prepositus,jurati,scabini,cives」、「prepositi et majores communiarum」、「prepositi,jurati,scabini,alii cives」、「major et jurati,universi alii baillivi et prepositi sui」、「prepositi,jurati,scabini」などと表記されている。(51) これらの事例が王権による都市（communia,villa）への支配権の拡大、王の地方官と都市の上層部との統治における緊密な協働関係の形成を意味していることは言うまでもない。しかし、両者は王権との関係、社会構成上の位置を異にする主体であり、両者を一括対象とした令状の存在は書式面からはある種の "逸脱"、過渡的対応と言えなければならないであろう。

一方、（ロ）の事例はわずかに 1 例(52)、しかもフィリップ 2 世治世の最末期に当たる1222年12月に見られるに過ぎない。これはシャンパーニュ伯ティボー 4 世の役人たち（ballivi, prepositi,servientes）に対して、モーニュ教アモリーの遺言書の対象物権に手をつけることを禁じるものであるが、著者は王の地方官に対する令状と全く同一であり、「mandantes vobis precipimus et firmiter inhibimus ne...」という厳しい命令文が用いられている。この令状が王の支配権の拡大を示すものであることは（イ）と同様であるが、世俗諸侯を経由せずに、その下僚に対して直接的な命令権を王が行使し得るに至った点が、次代の時代を予示するものとして、注目に値する。

その他、文書形式として興味深い点は、通常では令状の内容をなす、地方官に対する命令事項、彼らの活動内容が他の文書の中には含まれている事例が幾つか見られる点である。それらに共通な点はその文書の宛先が「現在のすべての人々（universi presentes）」または、単に「すべての人々（universi）」、つまり不特定多数の人々となっている点である。即ち、王の地方官に対する指令内容を当事者間の問題としてではなく、それを客観化し、広く一般に知らしめることを意図したものであることを示している。このことと、彼らの活動が令状のように二人称ではなく、三人称で記載されているとは密接に関連している。この場合、書式的には a) "salutem" で始まり、宛先が上記のように異なる点以外は通常の令状と全く同一の事例(53)、b) "salutem" で始まる、基本的に証書形式で(54)、印刷への言及が見られるもの(55)もある。

a) との関係では、e) 書式は全く同一であり、王の地方官に言及せずに、王の命令（mandatum）の内容のみを記載したもの(56)が見られる。a) と c) は実質的には同じであるが、a) 方が地方官の活動に直接言及しているため、より現実性を帯びているということができる。同時に d) 内容は王の命令ではないが、書式が全く同一の事例(57)が見られる点に留意する必要がある。結局、a)、c)、d) は書式的には同一であり、それは内容の最小限の概略を広く、簡明に一般に伝える
ために多用された文書類型と言うことができる。逆に、この簡便な書式が宛先を王の地方官に限定する形で指令文書（mandement）として活用されたと言うことができる。

他方で、これと全く逆にした事例も見られる。王の指令文書が“三位一体への祈願（invocation verbale）”で始まる尊厳型証書の形を取って、しかもフィリップ2世治世の最末期、1221-22年に現れるのである(59)。確かに、この点は、その内容がボンティニー、クレルヴォーのシトー派の両母修道院と各地の娘修道院を包括的に王の保護下におくという壮大で広範囲に及ぶものであると言うことと関係しているのは事実である。しかし、他方で、各種の国王役人層（bailiivi sui,majores,prepositi et aliiiquumque ab ipso potestatem habentes）を名宛人とし、“mandamus vobis precipimus quotinus...defendatis..”、“...vobis singulis et universis precipimus ne ...”と二人称表記の指令文書であることは明らかである。これは、この文書が“pagina”と呼ばれていることからもわかるように、指令内容を権威づけるために、敢えてアルカイックな書式を用いたものと思われる。

これは書式的には、一時的な、例外的な“揺れ”、或いは“逆道的”、“反道的”な現象と見えることができる。しかし、ここで重要な点は、上記の王の命令内容の証書への再録の諸事例と同様に、王の地方官への命令が実効性と権威を持つに至り、それが証書と同様、権利の保証と証拠能力を持つことに関わっている点である。その背景には地方官の活動の活発化、彼らに対する王の統制力の強化、更にはその前提としての王の地域レベルでの影響力の拡大があることとは言うまでもない。上述のプレヴォと都市民、特にその支配者層双方、或いは世俗諸侯の役人層を直接的な名宛人とする指令文書の存在もその一端を示すものである。

しかし、書式上の一時的な逆行現象は見られるものの、体制的にはフィリップ2世期に令状の一層の統一化、定式化が進んだことは否定できない。即ち、その特徴として、①“salutem”で始まり、②主文の動詞には“mandamus”、“precipimus”が用いられ、③末尾には“vale”、“valet”ではなく、発給地、発給年・月が記され、④印鑑への言及が見られないという点を挙げることができる。

特に②の面が重要である。役人またはその集団に宛てた令状は、殆どが特定の措置を執行或いは禁止させるためのものである。例えば、フィリップ2世は裁判官たち（judices）に教会間の相続を裁くよう命じ、その判決を遵守せしめ、違反者を処罰せしめるために令状を発し、また、王の忠臣たる修道院長に従わない従属人たちを捕縛し、裁くために引き渡すよう指示した令状を発している(59)。そこから、主文の動詞には一般に“命ずる”という意味の“mandamus”、“precepimus”或いは“禁ずる”という意味の“prohibemus”が用いられる。それに対し一般の書簡では相手を誘導すべく、動詞としては習慣的に“懇請する”という意味の“rogamus”が用いられる。このように指令文書である令状は、しばしば重要人物に対し直接的、個人的用件、緊急の問題のために認める書簡一般とは異なるのである(60)。

もちろん、令状の宛先は地方官に限らず、聖俗諸侯、修道院長、中小領主、都市の上層部宛てのものも少なくない。しかもフィリップ2世期における特徴は、聖俗諸侯宛てのものに
“mandamus”に“rogamus (懇請する)”や“requirimus (要請する)”が付随する例が若干見られるものの、基本的に地方官宛ての令状同一の書式が用いられている点にある(61)。この点は、王の聖俗貴族＝領主層全体に対する統制権の強化を背景に、令状の定型化が一層進んだことを示している。このことは、上述の如く“valete”で終わる事例、年表記に“ab anno incarnationis domini (verbi)”を用いる事例、印鑑への言及が見られる事例(62)など、書式上の伝統を部分的に継承する諸事例が、いずれもフィリップ2世治世の比較的早い時期に集中している点からも、逆に裏づけられる。

(3) ルイ8世、ルイ9世期（1223－1270年、完成段階）

ところで、上述のような形でフィリップ2世期に確立した令状の書式が、次のルイ8世治世（1223年7月14日－1226年11月8日）に殆どそのまま継承されたことは、数は少ないが、残存する同王の一連の令状から裏づけることができる。その典型例として、治世末年の、モンフェランの上層部市民たち（burgenses）に通行の自由を認めるようすべてのバイイ方に命じた令状（1226年3月）(63)を挙げることができる。

1) Ludovicus,Dei gratia Francie rex,
2) universiss ballivis suis ad quos presentes littere pervenerint,salutem.
3) Mandantes vobis precipimus quatinus....
4) Actum apud Vicenas,anno Domini M°.CC°.XXV°.,mense marcio

これと全く同一形式のものは遅くともフィリップ2世期、1203年8月(64)まで遅ることができ、また、降って、次のルイ9世治世（1226年11月8日－1270年8月15日）について、筆者が参照した35通のうちわずかに1通を除き、他のすべては上掲のものと基本的に同一形式であると言える。上述の如く、フィリップ2世期を通じて散見された1発給地、発給年・月を欠く事例はわずか1例に過ぎず、2国王の地方官と都市の構成員双方を名宛人とする事例は見られない。その意味でルイ8世期は劣等するとしても一、遅くともルイ9世期には令状は上記の形に最終的に統一されたと見ることができる。

但し、筆者の知見では、ルイ9世期の令状の特徴として①発給の日付がルイ8世期までのよう、年・月だけでなく、より正確に年・月・日を記しているものが、同王の治世半ば1247年頃以降、少なくからず見られるようになること、②指令内容の背景、根拠を示すために過去の証書（carta）、令状をそのまま拡大する事例が見られること、が挙げられる。いずれの事例も令状の実効性を高めるうえで、重要な要素であったことは十分推測することができる。特に②の点はルイ8世期、フィリップ2世期と比較するとより明瞭となる。

令状の主文（上記3）には通常、指令内容が簡潔に記載されているが、それに先立って、その根拠、そこに至った背景と事情は述べられている事例も少なくない。即ち、（a）「以下のことをおあなたがは知るであろう（noveritis...）」、（b）「それ故に（unde,iccirco）以下の如く命ずる」という形が取られているのである。（b）を正当化するために（a）が必要である、ということである。この主文形式はフィリップ2世の治世初期以来、一貫して（b）のみのものと並存してお
この正当化の際に、しばしば過去に発給された文書が引き合いに出されるが、問題は、旧来はその存在、内容への間接的な言及であったのに対し、ルイ9世期には、上記②のように、当該文書、証書ときには令状をそのままの形で（a）の部分に転載するという事例が現れるということである。この形式は書式的には令状に特徴的な簡潔性を損なうことになるが、逆に令状自体の権威と実効性を高めることになる。その背景には広い意味での証拠主義の浸透、立証手段としての文書の重要性の認識の高まりがある。ここに至る経緯を振り返ってみる必要がある。

フィリップ2世治世の前半には（a）の部分を欠く令状の主文の中で、「（先王の）証書に含まれているように（sicut in cartis continetur）」（1204.6）、「彼の証書の主旨に従って（secundum tenorem carte sue）」（1204.7）、「彼らの証書が証明するように（sicut carte eorum testantur）」（1205.2）という形で言及されている。同王の治世末期の令状においても同様であり、「（かつて、受給者が）この証書によって享有したところで従って（secundum quod usi sunt...de eadem carta）」（1215.1）、「これらの証書に含まれているように（sicut in cartis ipsorum continetur）」（1217.3）、「これまで（受給者が）この証書を利用してきたように（sicut eadem carta sunt hactenus usi）」（1217.6）という形で言及されている（65）。

一般に令状の中では令状自体と証書は、用語上明確に区別されている。より正確には後者が通常“carta”、または場合によって“privilegium”を指される（1207.12；1214.10；1217.18.3）（66）のに対し、前者は単に“litterae presentes”と表記されるに過ぎないのである。また、令状の命令内容の部分に“visis litteris”という形で見られる（1214.8；1217.18）が一例目（visis litteris regie majestatis）（67）、これは“（本令状の）文面を良く見て（命令を実行する）”と解すべきであろう。また、王権の側からした場合、証書と令状とは機能上、明確に区別されていた。例えばオルレアンのヴェヴォたちが宛てた1令状（1217.6）（68）では、証書は物権贈与のために作成したものであり、令状は“それとは別に法により、（王の地方官が）当該物権を監視・保護するために発したもの（terramque et res dictorum monachorum,sicut aliter vobis mandasse recollimus, custodiatis et defendatis per jus）”なのである。

確かに、「上記の王の証書に含まれているように（sicut in carta predicti regis continetur）」（1219.11）と記した上で、その令状自体も“presens carta nostra”と表記している事例が見られる（69）。しかし、これは極めて例外的であり、ルイ9世の最末期、1270年の2通の令状は、“damus vobis tenore presentium (litterarum) in mandatis”，“vobis nostris damus litteris presentibus in mandantes (sic,mandatis)”とあるように、正確に“命令のための本書状（litterae presentes in mandatis）”の表現されているのである（70）。

ところで、ルイ8世期の令状では、主文の（a）の部分に以前に発給された証書（carta）への言及が見られるもの（1223.1）、（a）の部分を欠く主文のなかで以前の証書（cartae）の保持を命じているもの（1225）；同様に以前の証書の内容に沿って権利の保証を命じているもの（1226）が知られる（71）。

（45）
そしてルイ9世期になると、上述のように、主文の（a）の部分に命令内容の根拠となる文書（証書または令状）の全文がはめ込まれる事例がしばしば現れるようになる。著者の知り得る最初の事例（1246.8）では、全文の引用に先立って「我々が先王の文書を以下の文言により検討したことをあなた方（王の地方官たち）は知るであろう（Noveritiis nos litteras... genitoris nostri, vidisse et inspexisse in hec verba）」と記されている。他の事例でも同様に「Noveritis nos inspexisse litteras avi nostri sub hac forma」（1248.6.）、「Noveritis quod nos litteras avi nostri vidimus in hec verba」（1255.10; 1257.4; 1257.4）、「Noveritis quod nos litteras...regis inspeximus in hec verba」（1258.11）などと記されているのである（72）。

同時にルイ9世期の令状において目を引くのは、相手方が権利要求の根拠として提示し、令状発給の前提となった文書を王の地方官は検証した後、例えば「Hoc autem facto, reddas hujusmodi litteras archiepiscopo antedicto」（1256.7）とあるように、相手方に返却するよう令状の中で敢えて指示している点である。他の令状では、同様に「litteras reddi abbatii faciatis」とされており、そこでは、相手方の修道院長が提示した文書には王の印璽が付されていることが強調されている（1256.8）。或いは「文書が（相手方の）小僕僧院長の命により（王の地方官に）提示がされ、同院長に返却されるべき（reddendo presentes litteras priorisse vel ejus mandato tibi easdem ostendenti）」（1268.10）と記されている（74）。

とりわけ、上掲の1256年8月の文書では、修道院側に対し、提示された協定内容を記した「他の文書（aliae litterae）」を返却させるだけでなく、その執行に際しては修道院側が新たに同意の文書（litterae）を迅速に作成し、王の地方官（seneschallus）に伝達することを求めるよう命ぜられている。しかも、「その書式は当該令状に添付される形で地方官に送達されている（forma quam vobis mittimus litteris nostris annexa）」のである。

これらは証書、その文言が権利要求の際にいかに重要であり、それだけに王の地方官もその慎重な取り扱いを求められていたかを示すものである。しかも、上記の全文転載の事例では証書一般だけでなく、令状自体もその対象となっているのである。このことは令状の本文も確立し、その立証手段としての権威が高まったことを示すものである。それを如実にしめすものは、書式的には異例であるが、ルイ9世が広くその地方役人たち（baillivi, prepositi, vicecomes, maiores, et alii ministres）に宛てた Lawrence文書（1258.11）である（75）。この文書では（a）の部分に当該地域のかつての支配者たちイギリス王リチャード1世の令状（1190.11.12頃）一聖俗諸侯宛てではあるが一方はめ込まれた形になっているが、この文書は全体として、「presens pagina」と呼ばれ、通常の令状の書式の後に、典型的な証書同様、王の印璽と花押による強化、証人の連署を伴っているのである。

（4）令状の機能と実態

ところで、尚書局の日常的な活動の中心が日々の王国の統治にあり、令状がそれにと直結した文書であるにも拘らず、その残存量は意外に少ない。それは令状が基本的に一時的な措置を求めたものだったからである。事実、「これと反する（内容の）我々の命令を受け取るまで（donec mandatum
フランス中世王権と地方統治 -12・13世紀における令状（mandement）の史料論的検討 -

nostrum in contrarium habeatis）」、「この文書は我々にとって好都合な限り存続する（durent littere iste quamdiu nobis placuerit）」、「この文書は四旬節の第一日頃まで存続する（durent littere iste usque ad Quintanum （Quintaine）」、「この文書は現在の聖ヨハネの生誕日から二年間わたり存続する（durent littere iste ab hac presenti Nativitate beati Johannis in duos annos）」（70）のように当該令状の有効期間に言及されている事例も少なくないのである。

フィリップ2世治世でもバイファイル両国役人に宛てた令状の残数は100通に満たない。この点は「王の命令により（de mandato regis）」という表記を含む証書が数多く見られることと対照的である（77）。これらの証書には、多分の場合、その命令の具体的な執行に至る経緯、例えば、令状が発せられたか否か、王の役人層がどのように関与したかは記載されていない。それは、当事者にとって重要なのは命令の対象事項、内容であることを考えれば当然であろう。但し、当該事項が王の命令により決着したことを記すことで、それを権威づけ、それに永続性を与えようとしたことは間違いない。例えば、同王が王国の「裁判官たち一般（justiciarii regni nostri）」に宛てた1令状（1194.4）（78）には「我々の王としての命令に敢えて異議を唱える者は、我々の王としての権力に反意を持つことになる（si forte aliqui contra mandatum nostrum regium attemptare pres umpererint, indignationem nostre regie magesstatis noverint se incursuros）」という警句が記されているのである。

これらの証書から、最小限、王がどのような事項、問題に命令を発する形で関与したかも知ることができる。フィリップ2世期について見ると、対象事項としては証書自体の残存傾向を反映して、種々の宗教組織の権益、利権の確立と保全に関するものが多いのは当然であるが、王と都市および世俗貴族間、世俗貴族相互間、彼らと教会間の友好・誠実関係、それに伴う物権の領有に関する事項が少なくなない段階に至る。これらは同王の治世に教会の保護、ローマ関係の整序が意識的に推進され、延いで王権の強化、社会の諸階層に対する影響力が拡大したことを示すものである。

ここでは特に王の命令（mandatum）と現地の国王役人の関係が問題となる。結論的には1王の命令が国王役人に直接向けられた場合と、2第三者に向けられた王の命令の確認役として国王役人が登場する場合とがある。2としては、教会からの受封地（feodum）を了解なく奪取した封臣が「王から命により（de mandato nostro）」、国王役人（baillivi nostri, major）の面前で代金を賃主に返納している事例（1206.4）（79）、教会間の争論を「王の命により（ex mandato nostro）」裁判官たち（judices）が裁き、その結果の遵守を王が令状により国王役人たち（bailivi et prepositus）に命じている事例（1191.6）（80）などが挙げられる。

他方、上掲1としては、騎士たち（milites, scutiferi）の王領地における権利要求に対して、その正当性の調査（inquisitio）を「王の命により（de mandato nostro）」、当該バイアイ管区（ballia）の国王役人が行なっている事例（1222.8）、令状のなかで、制裁のための、教会領から逃亡した従属民の捕縛と引渡しは「王の命令に従い（secundum mandatum nostrum）」、国王役人（bailivi, prepositi）がなすべきこととしている事例（1220.11）、教会領に力ずくで踏み込み、裁判権を要
求する者は“王の命に対する違反者（mandati nostri transgressores）”と見なし、略奪者、侵略者
と同等に国王役人（ballivi,majores,prepositi,alii ab ipso potestatem habentes）により捕縛され、処罰
されるべきとしている事例（1221/22）などが知られる。また、ルイ9世治世の特殊な例である
が、バイイ管区内で捕獲された鯨の領有権の要求が調査に基づき、教会側から王の面前でなさ
られ、“王の命により（per mandatum domni regis）”、管区のバイイが教会に代金を支払っている事
例（1247.7）が知られる(81)。

ところで、今日伝来する令状の殆どは、発給者側たる王ないしその役人ではなく、利害関係に
ある当事者（受益者）に特に宗教組織に保存されている。それは後者が令状または、その副本
（exemplaire）を受け取った可能性を示している。その意味では、同王がムーラン（Meulan）の
プレヴォに対し、王の水軍からの定期金（ランツ）徴収権を一都市民（burgensis noster）に返還
するよう命じた令状（1205.1）が興味深い(82)。そこでは「このことが強固で安定的であることを
欲する故に、我々はこの文書を彼とその相属人たちに引き渡されるよう命じ、また欲するもの
である（quoniam volumus hoc esse firmum et stabile,precipimus tibi et volumus ut eidem vel hereditus
suis litteras istas reddas）」と記されており、当該令状が国王役人を経由して受益者のもとに保管さ
れたことを示している。同様に、オーセールの聖堂参事会教会への贈与に関してフィリップ2世
がギアンのプレヴォに宛てた令状（1204.8）(83)でも、教会側が当該令状（littere presentes）を提
示する度ごとに、それを彼らに返却することを命じているが、この令状をプレヴォに送達するの
は、「令状を彼が保持するためではなく、王に代わって、当該教会に対して贈与義務を果すため
である」と明記している。

文書全般、とりわけ令状の送達を担った存在として“lator presentorum”が想定される。この
職名は伝令・使者の意味で既にルイ6世時代の書簡に現れている。1通（1109年頃）はアラス司
教ダンペールが同王に宛てたもので、「この我々の使者、本書状の伝令に対し、彼が我々の要請
事項をあたえ方に速やかに報告する場を与えるよう懇請する（Rogamus, quatenus huic nuntio
nostro,praesentium latori,locum donetis,ubi vobis licenter quae mandamus denuitent）」と記されている。
他の1通（1121年頃）は同王がローマ教皇カリクストゥス2世に宛てたもので、その末尾に「こ
の文書に含まれている事柄は少ないが、本書状の伝令であるアルグリヌスが活発な口調でそれを
補うであろう。我々の発した言葉と同じように彼の言葉を受け入れ、見守って頂きたい（Quod
minus in literis continetur,praesentium lator Algrinus viva voce supplement,cujus verba tanquam ex ore
nostro suscipite et custodie）」と記されている(84)。lator presentiumはフィリップ2世がノルマン
ディーとアンジェのバイイたちに宛てた令状（1205）(85)に現れる。そこでは、療病院への施
物の伝達役を任としている。

降って、ルイ9世時代の文書にもこの職名は数度現れる。その内、2通の地方官宛令状
（1259/60.2,1269.8）では、“森番（forestarius）”とは別の王の森の“監視役（cutodia,serjante-
ria）”として現れる。この職務遂行には日当が支払われるが、この職務と文書送達の任務との関
係は不明である。他の2通（1262.4,1262.5）はいずれもイギリス王ヘンリー2世宛の要請書である
が(86)、それぞれルーアンの1都市民（civis）が実名入りで、“lator presentium”として現れてい
る。

最後に令状と印璽の関係であるが、上述のようにフィリップ2世治世初期に令状の文面では基
本的に印璽への言及が見られなくなるのも事実である。このことが、直ちに印璽を添付しない令
状が一般的化することを意味するものではないことは言うまでもない。例えばフェカン修道院の自
由・特権の支持をノルマンディーのすべてのバイイに命じたフィリップ2世の令状（1207.12）(87)
には「(印璽の) 添付により、以下を命ずる（mandamus vobis per appositione quod...）と記
されているのである。

また、令状の送達形式については、フィリップ2世末期以降のそれ原本を精査したG.テシエは、
結わえるための線条が印璽用の尾の上部に付着していることから一“封印”ではないが一
特別な形で結わえて送達されたものと推定している。この点は、同王が国王役人たち（既、パ
イイ、プレヴォ）に宛てた令状の中に、敢えて「指令をすべて執行した結果を開封書簡で王に上
奏するよう（cum hec omnia feceris,nobis ea significes per litteras suas patentes）」特記したもののが見ら
されることからも逆に推測される(88)。

しかし、現在の令状で印璽の残存するものは極めてまれであり、用いられた印璽の形態、添付
形式はよくわからない。わずかにルイ7世が国王役人たち（prepositi,servientes）に宛てたシャ
トーダンの聖マリア教会の所領保護に関する令状（1152年頃）では一重の尾に白ロウの印璽が付
されている(89)のが知られるに過ぎない。フィリップ2世時代には国王証書の印璽形態、添付様
式が確立するが、令状には、大権印璽（seau de majesté）と同タイプの小型印璽が用いられたも
のと思われる。同王がノルマンディーの総てのバイイに宛てた1通の令状（1218年）の原本が残
存し、一重の尾に印璽が添付されており(90)、封印されたものではないことが知られる。

ところで、王のバイイとプレヴォ一般に宛てられた令状の末尾に彼らに対する罰則規定を含む
ものが見られる（1190.4,1210.5）(91)。彼らのうち、王の命令の違反者（precepti transgressor）は、
「この命令の執行（hujus precepti execucotio）」、または「この命令の条項（hujus exceptio
mandati）」に背く度に100ソリドゥスの制裁金を王に支払うことが規定されている。ここから王
の命令を指す言葉として“mandatum”と殆ど同義に“preceptum”が用いられているのが知られ
る。バイイたちに宛てた1令状（1215）(92)では、彼らが「王の命により（ad mandatum et
preceptum nostrum）」、係争処理に先立って誠実な事実調査（inquisitio）を行うよう命ぜられて
いる。また、1証書（1202/3）には都市共同体（communitas）が「王の命令を前に（coram precepto
nostro）」平和を誓約したこと、他のバイイ、プレヴォ一般宛ての令状（1190）には教会の物権を
侵害した者から同等の物権を、「王の命により（ex precepto nostro）」差し押さえることが記され
ている(93)。

小括

以上、フランス中世中世におけるカペー王権の地域統治の発展過程を1.プレヴォ・バイイニ
重の統治体制の確立、II. 令状の形式的、機能的整備の両面から検討してきた。中世における王の権力の根幹は、上述の如く王領地と直轄行政組織にあり、これら両者の接点をなすのが、王の地方役人層であり、これら二つの課題が、王の権力基盤の確立過程を解明する上で不可欠のものであることは言うまでもない。

カペー初期の王領地は、一般に「領域というよりも諸権利の寄せ集め（ensemble des droits）」、または「境界が不明確な散在的な領域（territoire dispersé）」と見なされてきた。このような状況を出発点として、王領地の拡大と支配の精密化が徐々に進めていくが、その画期は一般に（1）12世紀初頭の「王権の覚醒期」、（2）13世紀初頭のフィリップ2世期、（3）1220年代の南仏への領域拡大期に置くことができる。

本稿の第一章では、王の地域統治体制の確立を明らかにすることが課題である。先ずプレヴォの出自と基盤が中央の国王大官属（grands officiers）同様主主層であること、プレヴォ職が世襲制から請負制に移行すること、また、彼らの職務がしばしばpotestasと表記され、その自律性がある程度認められていたことを指摘した。地域統治体制の本質的な画期が1180-90年代に始まるバイ・セネシャル制の導入にあることは言うまでもない。その形成・発展の上でイギリスの支配下にあった北西部フランスの併合の影響が大きい。バイ管区・任地の明確化、固定化が進むのは1220-40年代であるが、プレヴォ・バイの二重統治体制が確立し、バイが裁判、財政、軍事すべてにおいて主導権を握るに至るのは1250-60年代である。

これは1245年の行政改革の成果であり、これと並行してバイのクリア・レギスからの自立化、職責の分化が起こり、小領主出身者の現地採用が一般的となった。このことは地域統治の在地性の深化を意味するものであるが、他方で中央の統制権を維持・発展させる上では新たな、高次の地方との連携の補完手段、手法が求められることになる。

地域統治の効率化、高度化にとって中央の方針、判断を如何に迅速かつ的確に伝達し、それを実現するかが最も重要な課題であることは言うまでもない。このことと王が地方役人に宛てた指令文書たる令状（mandement）の変化・発展は密接に連関している筈である。この問題を扱ったのが第二章である。具体的には①フィリップ1世期→ルイ7世期、②フィリップ2世期、③ルイ8世→ルイ9世期の3期に分けて検討した次第である。

第一節（①）では、令状は11世紀の第4四半期に現れるが、カロリングの国王証書ではなく、書簡類の系譜を引くものであることを指摘した。しかし、ルイ6世、ルイ7世期の令状では書簡に特徴的な結句（vale,valet）を欠くものが半分ほどを占めており、しかも草書主体、証人・印鑑への言及、発給年を含むものも少なくない。これは簡略証書の要素の流を示すものである。

第二節（②）では、令状における結句の消滅は決定的となり、代わって末尾に発給地、発給年・月が表記されるようになること、年表記は“anno Domini”のみとなり、印鑑への言及も消滅する。また、令状ではなく地方官への指令内容を客観的に示す文書が現れ、しかもその文式が基本的に令状と同一であることが重要である。また令状は多様な階層を対象とするようになるが、これは王権の各地域への影響力の増大を示すものである。

(50)
フランス中世王権と地方統治 —12・13世紀における令状（mandement）の史料的検討—

第三節（⑨）ではルイ8世期に令状の書式が確立し、ルイ9世期には一貫してそれが踏襲されたことを指摘した。（イ）内書、（ロ）挨拶（salutem）、（ハ）命ずる（mandantes）で始まる主文、（ニ）発給地・発給年・月で構成されるが、ルイ9世期には年・月・日表記のもの、過去の証書・令状を主文にそのまま転載したものが多く見られる点が目を引く。これは令状の立証手段としての権威の強化を図ったものと思われる。

最後に第四節では令状の残存数が「王の命令により（de mandato regis）」という文言を含む証書の存在に比して余りも少ないることを指摘した。確かに令状が基本的に一時的な指令文書であることを考えれば、ある意味では当然である。しかし、他方で法令内容、経緯に触れているものも散見され、その場合には証書同様、立証能力があり、受益者に引き渡され保存されることも有り得たのである。その場合には令状に印録が添付されていた可能性は高いと思われる。

以上、本稿ではプレヴォ・パイユの二重性を根幹とする、13世紀中葉における王の地域統治体制の確立過程と並行して、令状の書式的整備が実現したことを明らかにすることができた。今後はこれを踏まえて王の地域統治の実態とそこにおける国王役人層の活動を検討することが課題となる。そこでは特に世俗諸侯、教会勢力、都市との関係が問題となる。これらの諸勢力との力関係が王権の安定と発展を規定するからである（94）。

【註】
(1) 拙稿「カペー王権と中央統治機構の発展」（渡辺節夫編『ヨーロッパ中世の権力編成と展開』東京大学出版会、2003年所収）、pp.147-183。
(2) 拙稿「カペー朝期フランスにおける王国統治と聖俗諸侯層—王国全体集会と勅令に関する一考察」『青山史学』23号、2005年3月、pp.171-188。
(3) 拙稿「フランス中世における王国同様制（pairie）の実態と基本的性格に関する一考察」『青山学院大学文学部紀要』47号（2005）、2006年1月、pp.185-205。
(7) J.Baldwin,Philippe Auguste et son gouvernement,p.62.
(9) 12世紀のコミュニ運動の過程で都市領主のプレヴォの支配を排除し、都市を自立的に統治する主体、即ち“市長（maire）”の意味でmajorは用いられるようになるが、領主の代官の意味でも並行して用いられた（S.Scoones,Les noms de quelques officiers féodaux(des origines à la fin du XIIe siècle),Paris,1976,pp.66-67.）。
(10) A.Luchaire,Etudes sur les actes(actes inédits),no.286,p.391.


(33) M. Prou, *Recueil des actes de Philippe Ier*, nos. 119 (a. 1089) ; 148 (a. 1104) ; 171 (a. 1106-08).


(36) *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, t. 16, p. 5 (a. 1139-40), pp. 8 (v. 1143) ; p. 7 (v. 1141) ; pp. 3-4 (v. 1137).


フランス中世王権と地方統治—12・13世紀における令状（mandement）の史料論的検討—


(49) Ib. t.II, no.874.


(51) Ib., t.I, nos.78, 441, t.II, nos.597, 662, 668, t.IV, nos.1635, 1765.

(52) Ib., t.IV, no.1806.

(53) Ib., t.III, no.1006, t.I, no.466.

(54) Ib., t.II, no.541.


(56) Ib., t.III, nos.1283, 1284.

(57) Ib., t.III, nos.1333, 1334.

(58) Ib., t.IV, no.1757.

(59) Ib., t.I, no.385(a.1191), t.IV, no.1670(a.1220).


(61) Recueil des actes de Philippe Auguste, t.III, no.1038(a.1208), no.1367(a.1214-15); Ib., t.IV, no.1511(a.1218), no.1437(a.1216), Ib., t.II, no.743(a.1203).


(64) Recueil des actes de Philippe Auguste, t.II, no.760.

(65) Ib., t.II, nos.804, 825, 872, 874, t.III, no.1356, t.IV, nos.1470, 1498.

(66) Ib., t.III, nos.1014, 1343, t.IV, no.1472.


(68) Recueil des actes de Philippe Auguste, t.IV, no.1498.

(69) Ib., t.IV, no.1611.

(70) L. Delisle, Cartulaire normand, nos.794, 797.

(71) Ib., nos.777, 347, 359.

(72) Ib., no.460.

(73) Ib., nos.472, 1188, 1196, 578, 605.

(74) Ib., nos.562, 731, J. de Laborde, Lafayettes du Trésor des Chartes, t.III, no.4282.

(75) L. Delisle, Cartulaire normand, no.605.

(76) Recueil des actes de Philippe Auguste, t.II, no.780(a.1203), t.IV, nos.1510(a.1218), 1824(a.1223).


(80) Ib., t.I, nos.385, p.476.

(53)
(81) Ibid., t.IV, no.1793 (p.466), no.1670 (p.329), no.1757 (p.423). L. Delisle, Cartulaire normand, no.465 (p.77).

(82) Recueil des actes de Philippe Auguste, t.II, no.866, p.454.

(83) Ibid., t.II, no.833, p.413.


(86) L. Delisle, Cartulaire normand, nos.639,758,683,684.

(87) Recueil des actes de Philippe Auguste, t.III, no.1014.


(89) L. Merlet et L. Jarry, Cartulaire de l'abbaye de la Madelaine de Châteaudun, no.XX (a.1152), p.24.


(92) Ibid., t.III, no.1370.


(94) 例えば G. Sivéry, Saint Louis et son siècle, p.253.